

ブワイフ朝ジバル政権の対外政策

——サーマーン朝との関わりから——

橋 爪 烈

はじめに

本稿の目的は、イラク地方の事例をもって語られる事の多いブワイフ朝史研究に新たな視点を加えるべく、その東方勢力との関わりを中心に、同王朝の勃興と勢力拡大の過程を検証する事にある。ブワイフ朝の歴史において、カリフの御座所があったバグダード及びイラク地方が重要である事は反論の余地がない。しかし、同王朝の政治はイラクのみで語られるものではなく、またイラクの事例をもってブワイフ朝全体の性格を規定する事はできない¹⁾。

その登場から滅亡までの全期間に亘って、ブワイフ朝は常に東方の勢力との対峙を余儀なくされた。特に勢力の拡大を図った初期においては、サーマーン朝が彼等の前に大きく立ちはだかり、ブワイフ朝の勢力の大部分をサーマーン朝との角逐に費やさざるを得なかった。最終的にサーマーン朝勢力をジュルジャーン以東に駆逐する事に成功するが、その間のブワイフ朝の対サーマーン朝軍事・外交政策がどのような経緯を辿ったのか、それに付随して両勢力の狭間にあった諸勢力の動向が如何なるものであったのか、そして、ブワイフ朝がサーマーン朝との角逐にある程度の成果を得、以後数十年に亘って東方の脅威を排除しえた原因は何であったのか、本稿では、以上の観点からブワイフ朝初期の対東方政策を検討する。この作業を通じて、カリフ権の失墜という状況を迎えていた当時の西アジアの国際情勢が如何なるものであり、また諸政権の勢力拡大や他勢力との関係構築における行動の基準が如何なるものであったのか、という事的一端を明らかにできると考える。

さて以上の問題に取り組むにあたり、参照すべき先行研究を紹介する。まずジバル地方のブワイフ朝政権については、カビールが同地方に割拠したブワイフ朝政権の略史を著している [Kabir 1958]。またケネディーはその概説書において、「ジバルに割拠したブワイフ朝政権の政治は外敵の脅威によって左右された」と的確な指摘を行っており [Kennedy

1) ブワイフ朝史を扱う研究のタイトルを見れば一目瞭然であるが、「イラク」とか「バグダード」という言葉が使用され、研究の中心がイラク地方にある事が分かる [Kabir 1964; Busse 1969; Donohue 2003]。

1986: 245], 筆者の見解もこれに倣っている。一方、ブワイフ朝とサーマーン朝の関係については、トレッドウェルの研究が参考になる。彼の博士論文はサーマーン朝の通史を描きつつ、その内部構造や地方支配のあり方を分析しているが、対外関係、特にブワイフ朝との関係の分析は物足りない [Treadwell 1991]。しかし、2003年の論文では、称号の問題からサーマーン朝の対外政策や姿勢を分析し、参考になる²⁾。

I ジバル政権成立からライの確保

1 「ジバル政権」の定義

まず本稿で使用する「ジバル政権」という用語の定義を明らかにしておく。筆者は拙稿において、初期ブワイフ朝はイマード・アッダウラ 'Imād al-Dawla, ルクン・アッダウラ Rukn al-Dawla, ムイZZ・アッダウラ Mu'izz al-Dawla のそれぞれが主宰する政権の連合体である事を指摘し、それぞれの政権を、各君主が根拠地とした地方名を冠して「フェールス政権」「ジバル政権」「イラク政権」とした。更に各々の政権は、君主とその息子達、吏僚や武将などの家臣、及び政権を支える軍団の集合体であるとした [橋爪 2003: 65-66]。

しかし、筆者は拙稿において、フェールス政権及びジバル政権を継承したアドッド・アッダウラ 'Aḍud al-Dawla が、ムイZZからイラク政権を継承したイZZ・アッダウラ 'Izz al-Dawla と争ってイラク政権を吸収し、ブワイフ朝を単独君主による一大軍事政権にまで押し上げた、その過程を検討した [橋爪 2003]。このアドッドによるブワイフ朝統一、すなわちジバル政権が単独でブワイフ朝を担うという状況になると、前述の様に三政権の連合体としてのブワイフ朝という捉え方はできなくなる。つまり、アドッドの統一の時点で、第一次「イラク政権」及び第一次「ジバル政権」という枠組みは解体する。アドッドの死後ブワイフ朝は再び諸政権に分裂するため、それらの政権を指して「イラク政権」「ジバル政権」と呼ぶべき政権が新たに登場するが、本稿で使用する「ジバル政権」はルクンに始まり、アドッドの統一によってその役割を終える「第一次ジバル政権」を意味する。本稿はこの第一次「ジバル政権」を対象とする。

2 ジバル政権の成立

ジバル政権の成立をどの時点に求めるかは若干の異論もあろうが³⁾、335 H 年 al-Muḥarram 月 (946年8月)におけるルクンのライへの入城時点をもって成立と考える

2) この他、Bosworth 1981 がブワイフ朝とサーマーン朝の狭間で活躍したサガーニヤーンの君侯イブン・ムフタージュ家の事績を紹介しており、参考とした。

3) ルクンがイマードの命を受け、ジバルに進出し、イスファハーンを獲得する時点やカリフから「ルクン・アッダウラ」のラカブを得る 334 H 年をその成立と考える事もできる。

[*Tajārib* II: 108; *Kāmil* VIII: 467]。その理由として、ルクンと兄イマードの関係を挙げる事ができる。

ズィヤール朝から独立し、ファールスに居を構えたイマードはルクンをジバル方面、ムイZZをイラク方面に派遣し、勢力拡大を図る。この時点では、二人の弟は兄イマードの一将軍として行動している。しかし、ムイZZに関しては334 H (945-946) 年以降、ルクンに関しては335 H (946-947) 年以降、イマードが「命令」という形で指示を与え、その行動を制御するという状況が見られなくなる [橋爪 2003: 64-66]。つまり、ルクンは335 H 年にジバルを征服して以降、兄から独立して政権運営を開始するのであり、この時点をもってジバル政権の成立と考える事ができるのである。ではこのジバル政権成立に至る期間の、ブワイフ朝の戦略はどのようなものであったのだろうか。

3 イマード・アッダウラの戦略

322 H (934) 年ファールス地方の主邑シーラーズに入城し、同年カリフから同地のアミールとして任命されたイマードであったが [*Tajārib* I: 299-300]、その勢力は小さく、旧主マルダーウィージュ *Mardāwīj b. Ziyār*⁴⁾ に対抗する力は全くなかった。そのためイマードはマルダーウィージュの名でフトバを行い、ルクンを人質として差し出すなど [*Tajārib* I: 302]、彼の機嫌を取る事で自勢力の保全を図る。しかし、翌323 H (935) 年マルダーウィージュが殺害され、彼の軍隊の一部を吸収すると、イマードはその恭順的態度を一変させる。彼は混乱するズィヤール朝の虚を突いて、ルクンを将とする一軍をジバル地方へ進軍させるのである [*Tajārib* I: 310, 312-315; *Kāmil* VIII: 312]⁵⁾。

イマードには、恭順的な態度を示しながらも、内心では勢力拡大を目指すという野心の強さがあったようである。そして、自らの真意を隠して事を行うという彼の姿勢は、次の事例からも明らかである。

333 H (944-945) 年ヌーフ I 世 *Nūḥ b. Naṣr* の命を受けたアブー・アリー *Abū 'Alī Ibn Muḥtāj*⁶⁾ はワシュマキールと共にライに進軍した。当時ライに駐留していたルクンは⁷⁾、アブー・アリー到来の報に接し、イマードに指示を仰ぐ。すると彼は、ルクンに一旦ライを放棄するよう命じる。その後、イマードはアブー・アリーとヌーフ I 世に対して離間策を用

4) ズィヤール朝の創始者。彼の死後、弟のワシュマキール *Washmakir* が同朝の君主となる。

5) マルダーウィージュ殺害当時イスファハーンにて人質となっていたルクンは獄吏を買収し逃亡する [*Tajārib* I: 315]。

6) 表 I ①及び④を参照。

7) イスファハーン侵攻後のルクンはワシュマキールと一進一退の攻防を繰り返して、329 H (940-941) 年にアブー・アリーが東方からズィヤール朝領内に侵入すると、これに呼応する形でライに向かい、330 H (941-942) 年アブー・アリーがナスル II 世 *Naṣr b. Aḥmad* の死の報に接してホラーサーンに退却すると、弱体化したワシュマキールの軍を破ってライを征服していた [*Tajārib* I: 352, 366, 380, 411; II: 3-8, 47; *Kāmil* VIII: 356-357, 359-361, 369-371, 388-391]。

表I サーマーン朝ホラーサーン総督

	人 名	着 任	解 任	在職年	在任当時の君主	離職事由
①	Abū 'Alī Aḥmad b. Muḥammad Ibn Muḥtāj	327 H	333 H Rajab	6年	Naṣr II~Nūḥ I	反乱→赦免
②	Abū Ishāq Ibrāhīm b. Simjūr al-Dawāṭī	333 H Rajab	335 H	2年	Nūḥ I	敗戦→退却
③	Manṣūr b. Qarātakin	335 H Ramaḍān	340 H Rabi' I	5年	Nūḥ I	戦没
④	Abū 'Alī Aḥmad b. Muḥammad Ibn Muḥtāj	340 H Ramaḍān	342 H	2年	Nūḥ I	反乱→亡命
⑤	Abū Sa'īd Bakr b. Mālik al-Farghānī	342 H (or 343 H)	345 H	3年	Nūḥ I~ 'Abd al-Malik	暗殺
⑥	Abū al-Ḥasan Muḥammad b. Ibrāhīm Ibn Simjūr	347 H	349 H Jumādā II	2年	'Abd al-Malik	解任
⑦	Abū Manṣūr Muḥammad b. 'Abd al-Razzāq	349 H Jumādā II	349 H Dhū al-Ḥijja	6ヶ月	'Abd al-Malik	政争解任
⑧	al-Ḥājib Alftakin	349 H Dhū al-Ḥijja	350 H	1年	'Abd al-Malik~ Manṣūr	政争解任→反乱
⑨	Abū Manṣūr Muḥammad b. 'Abd al-Razzāq	350 H Dhū al-Qa'da	350 H Dhū al-Ḥijja	1ヶ月	Manṣūr	引責解任→反乱
⑩	Abū al-Ḥasan Muḥammad b. Ibrāhīm Ibn Simjūr	350 H Dhū al-Ḥijja	371 H Sha'bān	20年	Manṣūr~Nūḥ II	政争解任→隠遁
⑪	Abū al-'Abbās Tāsh al-Ḥājib Ḥusām al-Dawla	371 H Sha'bān	376 H	5年	Nūḥ II	

い、両者の関係を悪化させる。彼は二枚舌外交によってヌーフ I 世には、ジバルルからの運上金をそれまでの二倍支払う事、アブー・アリーの後援を襲い、ヌーフ I 世に軍事的支援を行う事を約束する。一方、アブー・アリーに対しては、ヌーフ I 世のアブー・アリーに対する裏切りを警告し、ヌーフ I 世との戦いにおいてアブー・アリーを支援する事を約束する [Tajārib II: 100-101]⁸⁾。もちろん、イマードの離間策のみがヌーフ I 世とアブー・アリーの反目の理由ではない⁹⁾。しかし、両者の仲が芳しくない事を何らかの方法によって把握していたイマードは、その状況を利用し、巧みな外交手段を用いて、ライを容易に確保できる状況を作り出すという、真の目的を達成したのである。

この離間策の結果、アブー・アリーはヌーフ I 世の叔父イブラーヒーム・ブン・アフマド Ibrāhīm b. Aḥmad¹⁰⁾ をサーマーン朝君主に推戴し、ヌーフ I 世に対する戦いを開始する。その結果手薄となったライを、ルクンは容易に領有する事ができたのである [Tajārib II: 108; Kāmil VIII: 467]。

以上の様に、イマードは単に軍事的成功のみに依拠してブワイフ朝を創始しその勢力を維持したのではなく、様々な策略を用いて自らの利益を確保する手腕にも長けた人物であり、

8) この部分の引用は本稿第IV章1節に示した。

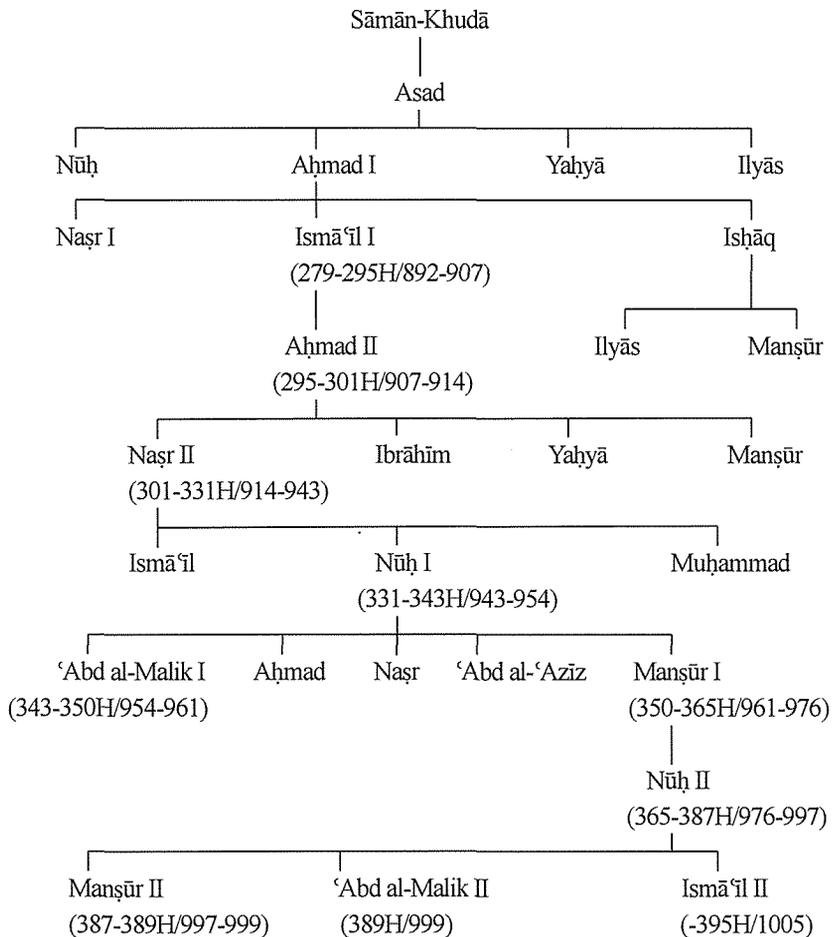
9) アブー・アリーがヌーフ I 世に対して反乱を起こした原因やその経過については、Tajārib II: 100-104; Kāmil VIII: 458-465 また Treadwell 1991: 212-230; Treadwell 2003: 320-324; Bosworth 1981: 6-8 を参照。

10) ナスル II 世の兄弟で、当時ハムダーン朝に亡命していた [Tajārib II: 101]。

その指揮下でルクンは335 H年にライに入城し、ブワイフ朝ジバル政権を樹立したのであった。

II サーマーン朝のジバル侵攻

第I章では、ジバル政権の成立にはイマードの手腕が大きく影響していた事を示した。しかしジバル政権成立後、イマードは弟ルクンに対して干渉しなくなる〔橋爪 2003: 66-67〕。史料からも335 H年以降はルクン自らがサーマーン朝やズィヤール朝との戦争・外交を指揮している様子が伝わってくる。本章では、ジバル政権とサーマーン朝の関わりについて、サーマーン朝による四度のジバル侵攻戦に注目し、それらの事例を時系列に並べて検討する。



サーマーン朝家系図

1 第一の侵攻

ジバル全土を確保し、勢力拡大を図るルクンの許に、サーマーン朝の将軍ムハンマド・ブン・アブド・アッラザーク Abū Maṣṣūr Muḥammad b. ‘Abd al-Razzāq al-Ṭūsī¹¹⁾ が亡命してくる [Tajārib II: 117; Kāmil VIII: 470–471]。これを契機に、ブワイフ家の三兄弟イマード、ルクン、ムイZZの間で、ルクンがホラーサーン方面に進出し、同地をルクンの領地とするという合意が成っている [Tajārib II: 117–118; 橋爪 2003: 63]。この合意は、ジバル以東はルクンの領地として約束された事を意味し、また兄弟の政権とは独立した政権としてジバル政権が存在した事の証明になろう。その後ルクンはこの合意に基づき、同盟者のハサン・ブン・ファイルーザーン al-Ḥasan b. al-Fayrūzān¹²⁾ と共にタバリストアン方面に侵攻し、ワシュマキールをサーマーン朝領内へ駆逐する [Kāmil VIII: 475–476; Takmila: 160]。

この様に政権樹立直後のルクンは、アブー・アリーの反乱によってサーマーン朝が自らの行動に対応できない事を見越して、東方への勢力拡大を図ったのである [Treadwell 1991: 212–230; Treadwell 2003: 320–324; Bosworth 1981: 6–8]。

一方ジバル政権の東方への拡大を懸念したヌーフ I 世は、アブー・アリーの反乱鎮圧直後に、マンスール・ブン・カラータキーン Maṣṣūr b. Qarātakīn al-Isfiyābī¹³⁾ をホラーサーン総督に任命し、ライへの進軍を命じる。337 H 年にイブン・カラータキーンは最初のジバル侵攻を試みている [Tajārib II: 117; Kāmil VIII: 478; Takmila: 161]。この時、ジバル政権はカスピ海南西岸一帯に勢力を張っていたムサーフィル朝¹⁴⁾の侵攻を受けており [Tajārib II: 115; Kāmil VIII: 478–480; Takmila: 161]、東西からの外敵勢力の圧力に直面することとなった。この東西両方面からの外敵の侵入に対して、ルクンはどちらも退ける事に成功した [Tajārib II: 119–120]¹⁵⁾。しかし、339 H 年 Šafar 月 (950 年 7–8 月) に始まるイブン・カラータキーンの侵攻はジバル政権最初の危機となる。340 H 年 Rabi’ II 月 (951 年 9–10 月) にイブン・カラータキーンがライ近郊で死去し、ルクンはサーマーン朝軍を排除し得たが、この間、ジバル地方の大半はイブン・カラータキーン的手中に落ち、ルクンはムイZZからの援軍を加え、ジバル地方の再征服に務めなければならなかったか

11) 表 I ⑦及び⑨を参照。トゥースー一帯の領主家系出身。彼の亡命理由については Kāmil VIII: 470; Minorsky 1956: 164 を参照。

12) ジェルジャーン地方の在地勢力の首領。詳細は第三章 1 節を参照。

13) 表 I ③を参照。

14) タールム、アゼルバイジャン、アッラーン、アルメニア一帯に勢力を張ったダイラム系の政権。当時最盛期を迎えていたムサーフィル朝の君主マルズバーン Marzbān b. Muḥammad はライに攻め込むが、ルクンの反撃に遭い、敗走した [EP²: “MUSĀFIRIDS”, VII, 655b–657b.]。

15) ちなみに Kāmil はイブン・カラータキーンの退却の理由を伝えているが、それは主君ヌーフ I 世に対する不信任からの撤退であった [Kāmil VIII: 478]。

らである [Tajārib II: 123, 126-127, 129, 136-143; Kāmil VIII: 486-489, 492; Takmila: 165]¹⁶⁾。

その後ルクンは、ムイZZの援助を受けつつ、徐々に失地を回復していった [Tajārib II: 138-139]。この事は、サーマーン朝の軍隊を軍力で排除できる程、ジバル政権及びブワイフ朝の全体の勢力が増していた事を示していよう。

2 第二の侵攻

二度目のサーマーン朝の侵攻は 342 H (953-954) 年に、アブー・アリー¹⁷⁾率いる軍勢によってもたらされた。この度の侵攻は、故地ジバル地方の回復を目指すワシュマキールがヌーフ I 世に支援を求め、それに答える形で起こった¹⁸⁾。三ヶ月に亙ってライの城門付近で戦いが行われたが、ジバル政権側の軍隊の頑強な抵抗と忍耐力に根負けし、また冬の訪れに伴う降雪を心配したサーマーン朝軍は和平を持ちかけ、ホラーサーンへ撤退した。一方、この和平に不服のワシュマキールはヌーフ I 世に手紙を書き、アブー・アリーのジバル政権との馴れ合いを告げた。これに怒ったヌーフ I 世はアブー・アリーをホラーサーン総督から解任し、バクル・ブン・マーリク Abū Sa'īd Bakr b. Mālik al-Farḡhānī¹⁹⁾ を大軍と共に派遣した。アブー・アリーはヌーフ I 世との関係修復を諦め、ルクンと誼を通じ、343 H (954-955) 年にはジバル政権に亡命を果たす。

一方、ジバル政権側は、恐らくムイZZを介して、カリフによる仲裁の使者をサーマーン朝へ派遣させる [Tajārib II: 147, 154-155; Kāmil VIII: 504, 505-506; Takmila: 168; Zayn: 29]²⁰⁾。

今回の侵攻においてルクンは、ダイラム兵特有の忍耐強さを活かし、三ヶ月に亙る攻囲に耐え、敵を撤退させる。敵将アブー・アリーがブワイフ朝と誼を通じた事のある人物で、和平交渉に持ち込み易かった事も幸いしただろう。アブー・アリーはルクンと和平を結んだ事によってヌーフ I 世からその忠誠を疑われ、再びホラーサーン総督から解任されるが、この結果サーマーン朝内部は混乱し、ジバル政権に有利な状況となる。更にサーマーン朝に

16) イブン・カラータキーンのジバル侵攻を招いた原因はルクンがジバル地方の守りを手薄にしたためであった。彼はイマードの死後の、ファールスの政情不安を鎮め、アドゥドの支配を確立するために、軍隊を率いてシーラーズに赴いていた。イブン・カラータキーンの侵攻は、このルクンの不在を衝くものであった [Tajārib II: 120-123, 137-138; Kāmil VIII: 482-483]。

17) 表 I ④を参照。一度はヌーフ I 世への反逆を試みたアブー・アリーであったが、その後ヌーフ I 世の赦免を受け、イブン・カラータキーンの死後再びホラーサーン総督に就任していた [Kāmil VIII: 493; Zayn: 29]。

18) Kāmil は 341 H (952-953) 年にルクンが再びタバリスターン、ジュルジャーニ遠征を行い、ワシュマキールをホラーサーンへと排除した事を伝えている [Kāmil VIII: 499]。

19) 表 I ⑤を参照。

20) Kāmil 及び Zayn はこの和平に関して、ルクンには毎年 200,000 ディーナール (以下 DNR) の支払いの条件が課されていたと伝えている [Kāmil VIII: 504; Zayn: 29]。

としてはヌーフ I 世の死去が重なり [Kāmil VIII: 508], 戦争継続が不可能となる。

加えてジバル政権は, カリフによる仲裁を持ち出し, サーマーン朝と和平を結ぶ事で, 今回の戦を終結させている。これは単に軍事力に頼るだけでなく, カリフの権威を利用して事を運ぼうとする姿勢の現れとみる事ができよう。この仲裁がカリフの自発的なものでない事は, 335 H 年や翌 343 H 年の事例からも明らかである²¹⁾。

3 第三の侵攻

サーマーン朝第三度目のジバル侵攻は 344 H (955-956) 年に行われた。この度の侵攻は二方面から行われ, 一方はバクル率いる軍隊がナイサーブールよりホラーサーン街道を西進し²²⁾, もう一方はムハンマド・ブン・マーカーン Muḥammad b. Mākān²³⁾ 率いる一軍が砂漠²⁴⁾の道を通してイスファハーンを攻撃するというものであった。諸史料はイスファハーンの戦いの詳細を伝えているが, バクル軍の詳細は不明である。イスファハーンを巡る戦いでは, ルクンの宰相イブン・アルアミード Abū al-Faḍl Ibn al-'Amid が活躍し, イブン・マーカーン軍を敗走させ, イブン・マーカーンを捕虜とする [Tajārib II: 159-161; Kāmil VIII: 511-512; Zayn: 30]。

イスファハーンでの勝利に勢いづいたルクンはジュルジャーンに侵攻し, 同地の征服を試みるが, バクルの到来を知ると, 彼と和平交渉を行い, ルクンがライとジバル全土を領有する代わりに, 貢納金を毎年支払うという条件²⁵⁾で和平を締結している [Kāmil VIII: 512]。

更に同年, 亡命中のアブー・アリーが死亡したため, ジバル政権とサーマーン朝との間で和平が成立, アブド・アルマリク I 世 'Abd al-Malik b. Nūḥはルクンを仲介としてカリフの叙任を得ている [Tajārib II: 161; Takmila: 170]²⁶⁾。

21) 334 H 年アブー・アリーの反乱に際し, 彼がサーマーン朝君主に推戴したイブラーヒームに対して, カリフはイマードの仲介によりホラーサーンの支配権を叙任する。この叙任により, サーマーン朝内部の主導権争いに混乱がもたらされた。この事が当時ジバル獲得を目指していたブワイフ家の主導で行われたものである事は Tajārib の記述より明らかである [Tajārib II: 103]。一方, 343 H 年の事例は, 342 H 年にホラーサーン総督から解任されたアブー・アリーが, サーマーン朝を見限ってカリフからの叙任を獲得しようとし, それに応じる形でホラーサーンの支配権が叙任されるが, ルクン及びムイッズの仲介があった [Tajārib II: 156-157; Kāmil VIII: 507]。この様に, 当時のカリフからの叙任はカリフを牛耳るブワイフ朝の意向が反映していると見て大過ないだろう。

22) バクル麾下の軍隊の具体的な行動は史料中には示されていない。しかし, イスファハーンへの救援に自ら赴かないルクンの行動から考えて, バクル軍はルクンをライに釘付けにしていたと考えられる [Kāmil VIII: 512]。

23) マーカーン・ブン・カーキー Mākān b. Kākī の息子。

24) イラン中央に広がるカピール砂漠及びルート砂漠を指す。

25) Zayn は貢納額について, 毎年 200,000 DNR と伝えている [Zayn: 30]。

26) バクルとの和平交渉に続き, アブド・アルマリクとの和平が成っているが, この点については考察を要する問題である。本稿第 IV 章 2 節を参照。

4 第四の侵攻

344 H 年の和平以後 12 年間、ジバル政権とサーマーン朝との間で表立った戦闘は行われなかった。この原因は、特にサーマーン朝内部の事情に求められる。

350 H 年 Shawwāl 月 11 日 (961 年 11 月 23 日) にアブド・アルマリク I 世が落馬により死去し、弟マンスール I 世 Manšūr b. Nūḥ が彼の後継者として擁立される [Tajārib II: 189; Kāmil VIII: 535; Takmila: 180; Zayn: 32-33]。このマンスール I 世の登極を巡るサーマーン朝宮廷内の権力争いに端を発し、二人のホラーサーン総督が相次いで更迭され、彼等を討伐するという事態に至る。一人は後のガズナ朝の創始者アルフトキーン Alftakin al-Ḥājib²⁷⁾ であり、もう一人は以前ジバル政権に亡命していたイブン・アブド・アッラザーク²⁸⁾ である。このサーマーン朝内部の混乱が対外活動を抑制していた事は想像に難くない。

その後、体勢を立て直したサーマーン朝は 356 H (967) 年に四度目のジバル侵攻を図る。史料はこの侵攻の原因として、キルマーンからブハラに亡命して来たイブン・イルヤース Abū 'Alī Muḥammad b. Ilyās がヌーフ II 世 Nūḥ b. Manšūr に対し、ジバル侵攻を促した事を伝えている [Tajārib II: 232; Kāmil VIII: 586]。そこで、ヌーフ II 世はジュルジャンの同盟者ワシュマキールに加え、ジバル政権との関係が深いイブン・フェイルザーンをも味方に付け、時のホラーサーン総督イブン・シームジュール Abū al-Ḥasan Muḥammad b. Ibrāhīm Ibn Simjūr²⁹⁾ にジバル侵攻を命じたのである。

これに対してルクンは、フェールスにいる息子のアドゥドと、甥のイッズに援助を求めた。イッズは政権内の内紛が原因で援軍を送る事はできなかったが [Tajārib II: 234]、アドゥドは援軍に際してその戦略的才能を示した。

アドゥドはイブン・ルーズマーン Abū Ja'far Ibn Rūzmān を将とする騎馬軍団をルクンへの援軍とした。そして、自らはホラーサーンへの進軍のためイスタフルに向けて出発した。そして、彼はハージブの一人を前衛軍と共にトゥライシース³⁰⁾ へ先行させた。そこで、アドゥドは自らの軍にこう言った「ホラーサーンの軍隊は総じて、諸地域から集まった者やガーズィーたちと共にライへ向けて進軍してしまっており、ホラーサーンは空である。よもやその地を征服できぬ事はない *wa laysa dūna mulki-hā shay'un*」

27) 彼の反乱とその理由については、Tajārib II: 191-192; Kāmil VIII: 544; Zayn: 32-33; Bukhārā: 135; Nāzim 1931: 24-26; Siyāsāt: 113-122; Darke 1960: 109-117 を参照。

28) アルフトキーンの反乱に続き、この反乱鎮圧のために派遣されたイブン・アブド・アッラザークもまたサーマーン朝の討伐の対象となる。これはアルフトキーン討伐失敗の責を問われた事、また彼のブワイフ朝との関係の深さが問題視されたためであろう [Zayn: 33-34; Minorsky 1956: 164-165]。

29) 表 I ⑩を参照。彼の父もホラーサーン総督であった。表 I ②を参照。

30) トゥライシース Ṭuraythith はナイサーブル近郊の村であるという [Mu'jam IV: 33-34]。

と。その話がホラーサーン軍に伝わると、彼等は若干退却した [Tajārib II: 233]。

アドッドは守りの手薄なホラーサーンへ向けて進軍したのである [Kāmil VIII: 578]。この策が的中し、サーマーン朝軍はダームガンまで退却する。ジバル政権は二方面からサーマーン朝軍を攻める姿勢を示したのである。

更にサーマーン朝側には、ワシュマキールが狩猟中に事故死し、彼の後継者ビーストゥーン Bihstūn がルクンと和平を結び、ジバル政権側につくという不利な状況が重なる [Tajārib II: 233; Kāmil VIII: 578; Zayn: 35]。その後の経過について史料は伝えていないが、イブン・シームジュール麾下のサーマーン朝軍は撤退を余儀なくされたものと見て大過ないだろう。ジバル政権は戦略的に上位を占めつつ、ワシュマキールの事故死という幸運も利用し、再びサーマーン朝軍の侵攻を退ける事に成功したのである。また今回、ズィヤール朝がサーマーン朝からブワイフ朝側についたという事も見逃せない。

以上サーマーン朝による四度のジバル侵攻について見てきた。最後の侵攻から5年後の361 H (971-972) 年、サーマーン朝とブワイフ朝の間で和平が成立する。この和平以後サーマーン朝がジバルに侵攻する事はなくなる。その理由はガズナ朝やカラハン朝など東方からの脅威に晒される様になる事やブワイフ朝がアドッドの治世を迎え最盛期に入り、その力関係に差がなくなっていた事などの状況が存在したためであろう。

III ジバル政権とサーマーン朝の狭間で

第II章では、ルクンの治世期における、サーマーン朝のジバル侵攻の様子を時系列に並べて検討した。ジバル政権は335 H年にライを根拠地として成立して以降、徐々にその勢力範囲を東へと広げていった。その勢力拡大がサーマーン朝に脅威を与え、故にサーマーン朝は征西活動を繰り返したのである。

本章では、第II章での検討を踏まえ、両者の角逐の内実を、その狭間にあって活躍した「サーマーン朝ホラーサーン総督」と「ジュルジャーンの君侯たち」の二点から検討する。

1 サーマーン朝ホラーサーン総督

287 H/900年、時のサーマーン朝君主イスマーイール I 世 Ismā'il b. Aḥmad はサッフアール朝君主アムル・ブン・アッライス 'Amr b. al-Layth の軍隊を破り、ホラーサーン地方の支配権をカリフより認められた [EI² VIII: 1026b]。以後サーマーン朝のホラーサーン支配が始まる。その中心都市ナイサーブールには、サーマーン朝から任命された役人が赴任し、軍事行政権を司った。諸史料は彼等に対する呼び方について一致せず、'āmil³¹⁾、iṣfahsalār

31) Kāmil VIII: 264, 356 では「ホラーサーン軍のアーミルに任命する *ista'mala 'alā*」とか「ホラーサーンとその地の軍隊のアーミルに任命する」と記されており、被任命者がアーミル 'āmil であった事を窺わせる。

[*Zayn*: 26, 29–35, 37, 40]³²⁾, *ṣāhib jaysh (or juyūsh) khurāsān* [*Kāmil* VIII: 492, 577, 626, 655] などと呼んでいる。しかしその職務内容は、特に軍事的要素が強い事から、彼等は単なる行政官ではなく、軍隊指揮権を有した総督であると考えらるべきだろう³³⁾。

表 I を参照されたい。ジバル政権と関わったサーマーン朝ホラーサーン総督就任者を列挙したものである。延べ 11 名の内、①, ③, ④, ⑤, ⑩の総督がジバル遠征を行った人物である³⁴⁾。⑩を除いて、在職期間が 2～5 年とそれ程長くない理由は、ホラーサーン総督の置かれた立場にあると思われる。彼等はホラーサーン地方の軍事・財政の両権を司り、西方諸君侯との交渉についても責任があった³⁵⁾。その大きな権限故に、サーマーン朝君主及び廷臣たちの嫉妬と疑念を受けると共に政争に巻き込まれ、ある者は解任されたり暗殺され、またある者はサーマーン朝君主に対して反乱を起こしたり、他国に亡命したりして、総督職を辞したのである。表 I の内、反乱を起こした者は①, ④, ⑧, ⑨の 4 名、亡命した者は④, ⑦の 2 名、暗殺された者は⑤である。

ここで、サーマーン朝支配体制を脱した二人の総督（④, ⑦）について、ジバル政権及びサーマーン朝の採った対応から検討する。この二人、アブー・アリー³⁶⁾とイブン・アブド・アッラザーク³⁷⁾は夫々サガーニヤーン、トゥースに割拠する豪族であった。二人は反乱や亡命によって一旦サーマーン朝政権の傘下から脱しているが、再びその傘下に入っている。これはサーマーン朝の政権構造と関係があると思われる。マワラーアンナフルを拠点に勢力を拡大したサーマーン朝は、その拡大に当たって、地方豪族の独立性をある程度認めつつ彼等を政権内に取り込んでいったのである [Treadwell 1991: 108–110]。彼等二人もそうして取り込まれた豪族の一部であった。これら地方豪族³⁸⁾の取り込みはサーマーン朝の勢力拡大に貢献しただろうが、反面同王朝の政権構造は常に不安定となった³⁹⁾。

ジバル政権の対サーマーン朝政策は、この不安定な政権構造を利用するものであった。

32) 特に *Zayn* ではホラーサーンの將軍職 *sipah-sālārī-yi khurārān* という表現が頻出する。

33) 但し、本稿では彼等の職務内容を詳細に検討した上で、「総督」と呼んでいるわけではない。今後の課題としたい。

34) 但し①は、ジバル政権成立以前に、サーマーン朝のジバル支配を確立するための遠征軍を率いた人物である。本稿第 I 章 3 節を参照。

35) ジバル政権との交渉の殆どはホラーサーン総督が行っている。例えば *Tajārib* II: 154, 161, 311–312 を参照。

36) 彼の行動については、本稿第 I 章 3 節、第二章 1～2 節、第四章 2 節及び Bosworth 1981: 3–10; Treadwell: 2003: 320–326 を参照。

37) 彼の行動については Minorsky 1956: 164–166; Treadwell 1991: 224–225 を参照。

38) ホラーサーン総督就任者の内、前述の二人以外にもバクル・ブン・マーリクがフェルガナの有力家系出身と伝えられる [Treadwell 1991: 314–315]。また *Ṭabaqāt* はバクルがブワイフ朝との関係を疑われて殺害された事を伝えている [*Ṭabaqāt*: 210]。

39) 332 H 年にはフワラズムの豪族イブン・アシュカーム Ibn al-Ashkām がヌーフ I 世に対して叛旗を翻すが、後に赦されている [*Kāmil* VIII: 415]。

先にイマードによるアブー・アリー調略の事例を示したが⁴⁰⁾、それ以外にもルクンがサーマーン朝宮廷の廷臣たちを買収し、同朝の対ジバル政権対策を混乱させようとしていた事を示す記述が *Kāmil* によって伝えられている。それによると、前述の如くイブン・イルヤースがマンスール I 世に対しブワイフ朝を攻撃するよう勧めた時⁴¹⁾、イブン・イルヤースはマンスールの廷臣たちがルクン（史料中では「ダイラム」）によって買収されていると忠告している [*Kāmil* VIII: 577]⁴²⁾。またルクンは、サーマーン朝側に接近しつつあったイブン・アブド・アッラザークに対しても各種の贈り物をし、結果イブン・アブド・アッラザークはサーマーン朝から疑われる事になる [*Kāmil* VIII: 533]。

この様にジバル政権は強大なサーマーン朝勢力の西進を防ぐために調略を用い、不安定なサーマーン朝ホラーサーン総督の地位をその格好の標的としていたのである。

一方、サーマーン朝も自らの勢力保持のために、反乱者や離反者であっても、自政権に取り込んで利用していた。サーマーン朝宮廷内の様々な思惑によって翻弄されたホラーサーン総督であるが、地方豪族出身の総督たちの保持する地盤と軍事力故に、サーマーン朝は彼等を容易に切り捨てる事ができなかったのである。

2 ジュルジャーンの君侯たち

本節では、両勢力の狭間で活躍したジュルジャーンの君侯たち、つまりズィヤール朝のワシュマキール及びその息子たちとイブン・ファイルザーンの活動の特徴について、また彼等に対するジバル政権及びサーマーン朝の対応について検討する。

まず、ワシュマキールであるが、彼は兄マルダーウィージュの死後、ズィヤール朝君主となる。だが兄の暗殺死で混乱する中、ブワイフ朝の侵攻を受け、徐々に北東部へと退却を余儀なくされた。ズィヤール朝の家臣であったイマードやルクンによってその勢力を削がれていく事は彼にとって耐え難い状況であったと思われる。故に彼は終生、反ブワイフ朝の姿勢を崩さず、357 H (967) 年に死去するまで、彼はサーマーン朝から援助を引き出しつつジバル政権からジバル地方を奪還することに努めた [*Kāmil* VIII: 471, 499, 577-578]。

一方、ジバル政権側もワシュマキールを徹底的に排除する方針だったようである。彼とジバル政権との交渉は一切伝えられておらず、ルクンは事ある毎にワシュマキールを攻略し、ジュルジャーンからの排撃を試みている [*Tajārib* II: 119-120, 158, 190; *Kāmil* VIII: 390, 475-476, 499, 504, 509, 527, 542]。ダイラム・ギーラーン地方出身の両政権は、その出自や支配の正当性の点で、共存の余地は全く残っていなかったのであろう。

40) 本稿第 I 章 3 節を参照。

41) 本稿第 II 章 4 節を参照。

42) ワシュマキールも同様の忠告を行い、イブン・イルヤースの情報を裏付けている [*Kāmil* VIII: 577]。

ワシュマキールの後継者ビーストゥーンは父の姿勢を踏襲せず、ジバル政権に接近し、同政権経由でカリフ・ムティー al-Muṭī' lillāh よりタバリストーン、ジュルジャー、シャールース、ルーヤーンの支配権を得ている [Kāmil VIII: 578; Zayn: 35; Ṭabaristān II: 4]。マルダーウィージュ死後、ズィヤール朝を受け継いだワシュマキールはサーマーン朝の援助を受けて、失地回復に躍起になっていた。そのため、ブワイフ朝は常に北東部に火種を抱える状態であった。しかし新たにズィヤール朝君主となったビーストゥーンは、むしろサーマーン朝との関係を絶ち、ブワイフ朝との関係を重視する事で、自勢力の保持を図ろうとしたのである。それはジバル政権にとっては好ましい状況だった。故にジバル政権は、タバリストーン地方などに対するカリフの叙任とザヒール・アッダウラ *Zahir al-Dawla* のラカブをビーストゥーンに与えるよう尽力したのである [Zayn: 35]。一方、次男のカーブース Qābūs はサーマーン朝ホラーサーン総督イブン・シームジュールと結び付き [Ṭabaristān II: 4]、その後反ブワイフ朝姿勢を鮮明にする⁴³⁾。

反ブワイフ朝姿勢を鮮明にするワシュマキールに対して、カスピ海南岸地域への影響力を保持したいサーマーン朝は全面的な支援を行ってきた。しかし、ビーストゥーンがブワイフ朝についた事により、同地域におけるジバル政権とサーマーン朝の勢力図がジバル政権有利に傾いた事は確かである。

最後にイブン・フェイルーザーンについて、彼はおおむねジバル政権寄りの姿勢を採っていた。彼とジバル政権の結び付きはアブー・アリーの最初のジバル遠征の時に始まる。イブン・フェイルーザーンはイマードが以前仕えたマーカーンと姻戚関係にあり、マーカーン殺害に関する疑惑から、ワシュマキールに対する復讐のためルクンと同盟を結んだ [Kāmil VIII: 388 - 390]。両者の関係は良好だったようで、ルクンは彼の娘を娶り、ファフル・アッダウラ Fakhr al-Dawla を儲ける。また、共同でワシュマキールと戦っている [Kāmil VIII: 475]。以下の引用は、ルクンとイブン・フェイルーザーンの結び付きの強さを示す一文である。

(ルクン曰く)「汝 (アドッド) は知らぬのか、余にとって他人であるハサン・ブン・フェイルーザーンを余が何度も助けた事を？ 余はその都度王国の外へ出て行き、余自ら命を賭してワシュマキールやホラーサーンの太守と戦い、その結果勝利して、彼等の領地を奪い、それをイブン・フェイルーザーンに引き渡し、そして、美名を求め、男氣を保つ事のために、1 ディルハム (以下 DRHM)、或いはそれ以下の価値のものも受け取らずに引き返した事を？ [Tajārib II: 350]

しかし、342 H 年にヌーフ I 世の仲介でワシュマキールと友好関係を構築して以降

43) カーブースは後に、アドッドの追求を逃れてきたファフルを助けてアドッドと戦い、共にサーマーン朝ホラーサーン総督ターシュ Abū al-'Abbās Tāsh (表 I ㊦を参照) の許へ逃亡する。

[*Kāmil* VIII: 505], むしろサーマーン朝側に立って行動している節もある [*Kāmil* VIII: 577]。しかしながら、ルクンは彼との関係を維持しようと 349 H 年にはジュルジャーンに行き、贈り物をしている [*Kāmil* VIII: 533]。また上記の引用はイブン・ファイルザーンの死 (356 H) から 8 年後の 364 H (974-975) 年の出来事での発言である事を考えると、彼とルクンの関係がそれ程悪化していたとも思われない。

彼の割拠したジュルジャーン地方は、ジバル地方から遠く、常にズィヤール朝やサーマーン朝の介入を受ける地域であったため、その政権は安定しなかった。そのため常にジバル政権との同盟に頼れなかったイブン・ファイルザーンはサーマーン朝との関係も結んでおく必要があったのだろう。彼は 356 H 年に死去するが [*Tajārib* II: 239], その後彼の一族はジバル政権とサーマーン朝の角逐において重要な役割を果たさなかったようで、その動向は史料には殆ど現れなくなる。

以上両勢力の狭間で活動した小勢力の動向を検討した。その結果、既に大勢力としてホラーサーン地方やカスピ海南岸地域に影響力を及ぼしていたサーマーン朝に較べて、新興のブワイフ朝ジバル政権は、特にホラーサーン総督の不安定な立場に付け込むなど、様々な外交政策を展開し、自勢力の拡大を有利に進めようとしていたことが明らかとなった。

IV サーマーン朝とジバル政権の外交交渉

第 II 章で示した様に、サーマーン朝は四度ジバル政権に対する遠征を行った。本章では、最初のアブー・アリー・ジバル遠征を加えた五度の遠征の前後において、ジバル政権とサーマーン朝間で行われた交渉の内容について検討する。

1 両者の交渉

334 H 年、イマードはヌーフ I 世に次の様な申し出を行っている⁴⁴⁾。

イマードはヌーフ I 世に対し、ヌーフ I 世とアブー・アリーの間で定められた事と同様に、10 年間ライの諸々の業務をイマードに任せる事で、その (ヌーフ I 世とイマードの) 疎遠状態を終結させる事を求めた。また彼は 1 年分の支払いをヌーフに前払いするという条件で、100,000 DNR を毎年上乘せして支払う事、ヌーフ I 世に、イマードとの契約を実行し金をその手で運ぶために、信頼の置ける人物を派遣する事を求め、またその後で、アブー・アリーに対抗するヌーフをイマードが支援する事、それはヌーフ I 世がアブー・アリーに勝利するまでである事を申し出た。 [*Tajārib* II: 100]

44) 経緯については、本稿第 I 章 3 節を参照。

これを見ると、ヌーフ I 世はアブー・アリーに対して幾らかの連上金を課してライを支配させていた事が分かる。イマードはその額に 100,000 DNR を増額してヌーフ I 世に支払う事を約束する。ヌーフ I 世がアブー・アリーに課した金額は不明だが、後にジバル政権とサーマーン朝との遣り取りで示される額が 200,000 DNR である事から推測して、基の額も 100,000 DNR であったと思われる。この 200,000 DNR は実際にヌーフ I 世に支払われる事はなかったようである [Tajārib II: 101; Kāmil VIII: 464]。しかし、この額が後にジバル政権とサーマーン朝の交渉の際にしばしば持ち出される事になる。

加えて、イマードは様々な奉仕をヌーフ I 世に申し出て、恭順の姿勢を示しているが、イマードはこの時点の自勢力がサーマーン朝よりも明らかに下位であると認識していたことが分かる。

第一のジバル侵攻の際ジバル政権とサーマーン朝の間で何らかの交渉が行われた形跡はない。しかし、第二の侵攻後の和平では、やはりルクンがアブー・アリーに 200,000 DNR の支払いを行う条件が示されている。更にこの和平にはカリフの口添えがなされ、和平に強制力を持たせようという試みが為されている [Tajārib II: 154; Kāmil VIII: 504; Takmila: 168; Zayn: 29]。

第三の侵攻後、ルクンはホラーサーン総督バクルと和平を結び、200,000 DNR の支払い条件を呑んでいるが、今回はこの支払いと引き換えにライ及びジバル全土の支配権をサーマーン朝側に承認させているのである [Tajārib II: 161; Kāmil VIII: 512; Zayn: 30]。また今回の和平にもカリフの関与があった。

第四の侵攻時には両者の交渉は行われず、ジバル政権とズィヤール朝との間で和平が結ばれただけであった。その後、361 H 年にジバル政権のルクン、アドゥド親子とサーマーン朝のマンスール I 世の間で和平が結ばれた⁴⁵⁾。今回もジバル政権にはサーマーン朝への貢納が課された [Kāmil VIII: 626; Takmila: 210]⁴⁶⁾。しかし今回の和平はこれに加えて、アドゥドの娘とマンスール I 世の婚姻が締結され、サーマーン朝からも莫大な贈答物が送られた [Tajārib II: 311-312; Kāmil VIII: 626; Takmila: 210]⁴⁷⁾。

以上の交渉から次の事が言えよう。まず、ジバル政権はサーマーン朝よりも下位の立場に甘んじているという事である。四度の侵攻を退け、軍事的な成果を挙げながらもジバル政権はサーマーン朝に対して、強硬な姿勢を示していない。上記の交渉中サーマーン朝が何

45) この和平交渉を整えたのは、サーマーン朝総督イブン・シームジュール (表 I ⑩を参照) であった [Kāmil VIII: 626]。

46) 但し、両者で貢納額が異なる。Kāmil は 250,000 DNR と伝えるのに対し、Takmila は 150,000 DNR と伝えている。また年代を伝えていない Zayn は 200,000 DNR としており [Zayn: 36]、額について見解が分かっている。

47) Kāmil はマンスール I 世の息子ヌーフ II 世とアドゥドの娘の婚姻として伝えている。

らかの金品の支払いを求められる事は一度もなく、常にジバル政権が支払いを求められる立場になっている。よって和平交渉などにおいてジバル政権はサーマーン朝に対して恭順の態度で臨んでいる事が分かる⁴⁸⁾。

尤も、交渉での決定通りに貢納を行っていたとも言い切れない。前述のイマードの例に見られる様に、何がしかの理由を付けて支払いを遅らせたり、支払わなかった事は十分に考えられよう。また、四度の侵攻時にも支払いが滞ったであろう事は容易に推察される。

また貢納額もそれほど高額ではなかったのではないだろうか。ムカッダシーはキルマーンのハラージュ額を 60,000,000 DRHM であった事、またジバル政権がキルマーンの支配権と引き換えにサーマーン朝に納めている額が 200,000 DNR であった事を伝えている [Aḥsan: 472-473]⁴⁹⁾。DRHM と DNR の比率が 1 : 10 であるならば、ハラージュにおける貢納額の占める割合は 30 分の 1、1 : 30 であるならば、10 分の 1 と、支払いが不可能な額ではない⁵⁰⁾。但しこれは試算であるので、十分な根拠をもって主張できるわけではないが、サーマーン朝への貢納額はジバル政権の財政事情にそれほど大きな影響を与えなかったのではないだろうか。

2 カリフの関与

次に、ジバル政権とサーマーン朝の交渉におけるカリフの影響について検討する。本稿の範囲においてカリフが関与した両勢力の交渉は、四回存在する。最初の関与は、334 H 年のアブー・アリーの反乱時に行われた。詳細は前述の通りだが⁵¹⁾、反乱軍はイマードを介してカリフの承認を取り付け、反乱の正当化を試みたのである。この正当化が功を奏したのか、反乱軍は一時サーマーン朝領の大半を獲得するに至る [Tajārib II: 102; Kāmil VIII: 460]。一方、反乱軍に対するカリフの承認という事態に直面したヌーフ I 世は、自らの支配の正当性を主張するために「天の承認を受けし王 *al-malik al-mu'ayyad min al-samā'*」という称号を用いて、カリフ政権との決別を表明する。これはヌーフ I 世とムティーの関係が断絶した結果であり、ヌーフ I 世は僭称者イブラーヒームに対する自らの正当性を主張したのだと、

48) トレッドウェルは、サーマーン朝はブワイフ朝を下位に見なしていたと断じている [Treadwell 2003: 329]。

49) 一方、アドッドは 357 H 年にカリフよりキルマーン地方の支配権を獲得している [Tajārib II: 253; Kāmil VIII: 585]。カリフの叙任を得ながら、サーマーン朝に貢納を払っていたかどうか疑問が湧く。そもそもムカッダシーが言う「今日まで」という表現が何時を指しているのか不明である。彼は少なくとも 375 H 年においてカリフ・ターイの治世が続いている事を書き留めているが [Aḥsan: 9]、その時期はサーマーン朝最末期に相当するため、ブワイフ朝が彼の執筆当時までサーマーン朝に貢納を行っていたとは考えられない。

50) 換算比率は、日本イスラム協会 (監) 『新イスラム事典』平凡社 2002 年の「ディルハム」の項に拠った。

51) 註釈 21 を参照。

トレッドウェルは言う [Treadwell 2003: 324–325]。

二回目の関与は 342 H 年に行われた。当時サーマーン朝の二度目の侵攻があり、カリフはジバル政権とサーマーン朝の和平を勧めるために使者を発したのである⁵²⁾。但し、この使者派遣については詳細な情報がないため、詳しい検討はできないが、使者はアブー・アリーへの許へ赴いたようである。また諸史料はルクンとアブー・アリー間の和平締結の事実しか伝えていない [Tajārib II: 154–155; Kāmil VIII: 504; Takmila: 168]。この後ワシュマキールがヌーフ I 世にこの和平への不服を申し立てると、ヌーフ I 世にとっても不本意な和平だったようで、アブー・アリーをホラーサーン総督から解任している [Tajārib II: 155; Kāmil VIII: 505]。この結果から推測すると、和平はアブー・アリーの独断であり、ジバル政権はホラーサーン総督アブー・アリーとの和平交渉のためにカリフの権威を借りたことになる。

三回目の関与は二回目と合わせて考える必要がある。ホラーサーン総督を解任されたアブー・アリーは再びヌーフ I 世に対して反乱を起こす。そして、カリフ側からのホラーサーン支配の叙任を、ルクンを介して要求する⁵³⁾。ムティーはこの要求を受け入れ、ヌーフ I 世の代わりに *makān Nūh b. Naṣr* 彼にホラーサーンの支配権を授与する。これに対しヌーフ I 世はバクルをホラーサーン総督に任命し、再びカリフの行為に異を唱えている [Tajārib II: 156–157; Kāmil VIII: 507; Takmila: 169; Zayn: 30]⁵⁴⁾。

四回目の関与は、344 H 年の三度目の侵攻時に行われた。イスファハーンへの侵攻軍を撃退したジバル政権は、東方へ進軍し、バクルと和平交渉に入る。この交渉の内容は *Tajārib* と *Kāmil* において異なる。まず *Tajārib* は

この年 (344 H 年) ルクンの家臣カーシャーニー Abū al-Faḍl al-Qāshānī が、ホラーサーンの支配者 *ṣāhib Khurāsān* アブド・アルマリク I 世の手紙を携えた (バクル)・イブン・マーリクの甥と共に (バグダード) に至った。(その手紙において) アブド・アルマリク I 世は、彼にホラーサーン (総督承認) の恩賜の衣 *khila'* と軍旗 *liwā'* を送付するよう求めていた。そこで、カリフはアブド・アルマリク I 世の手紙に対する返答として、軍旗を結び、それを恩賜の衣と共にイブン・マーリクの甥に手渡した。云々 [Tajārib II: 161]

と、ジバル政権とアブド・アルマリク I 世との間の交渉である事を伝えている。しかし

52) 詳細については、第 II 章 2 節及び註釈 21 を参照。

53) *Tajārib* には「イブン・ムフタージュ (アブー・アリー) はホラーサーンに対するカリフ側から *min jihat al-khalifa* の契約文書 *'ahd* が書かれる事を要求した」とあり [Tajārib II: 156], *Kāmil* には「ホラーサーンの統治権 *wilāya* について、カリフ側からの契約文書が書かれる事を求めた」とある [Kāmil VIII: 507]。

54) 但し *Takmila* は、この一連の出来事をヌーフ I 世死後の事として伝えている。なおこの反乱はアブー・アリー軍の四散によって直ちに失敗する。

Kāmil は

その後、ルクンはホラーサーン軍の長バクルに使者を送り、彼の歓心を買った。そして両者は、ルクンがバクルに運上金を供出する事、ライとジバル全土はルクンの所有である事を条件に和平を締結した。そしてルクンは弟ムイZZに使者を送り、バクルのためにホラーサーンの統治権（授与の証として）の恩賜の衣と軍旗を求めた。そこで、ムイZZはそれらをルクンの許へ送った。[*Kāmil* VIII: 512]

と、和平交渉がルクンとバクルの間で行われた事を伝えている。この後バクルが暗殺される事を考慮すると [Zayn: 31; Ṭabaqāt: 210], 事実は *Kāmil* の伝えた如くであったのではないだろうか。アブー・アリーが独断で和平を結んだ際にヌーフ I 世が不快感を露にした事は前述したが、今回の和平もサーマーン朝宮廷にとって不本意なものであったに違いない。しかしその様な和平が締結される事から、カリフの権威にもまだ影響力があった事が分かる。

以上、ジバル政権とサーマーン朝の交渉におけるカリフの関与について見てきた。ジバル政権は交渉を有利に運び、また勢力拡大の口実を得る手段としてカリフの権威を利用したのである。その際、イラク政権の関与が見られるので、ジバル政権が単独で行動したというよりも、ブワイフ朝全体の意志としてカリフの権威が利用されていたとみるべきだろう。一方、サーマーン朝側はブワイフ朝の傀儡として存在するカリフの権威ではあっても、その権威の行使に如実に反応を示したのである。カリフの承認を失った後のヌーフ I 世の行動も、サーマーン朝からではなくカリフからホラーサーンの支配権を獲得したイブラーヒームやアブー・アリー、バクルの行動も、カリフの権威がある程度有効であった事を示している。

お わ り に

344 H 年以後ジバル政権とサーマーン朝の交渉にカリフの関与は行われていない。これはジバル政権が、もはやカリフの権威を借りる事なくサーマーン朝と渡り合える様になった事を示していると思われる。ルクンの死後ジバル政権を継承し、イラク政権を吸収してブワイフ朝を統一したアドゥドは、イラク政権打倒の際に裏切った弟ファフルを討伐すべく、371 H (981-982) 年に弟のムアイド・アッダウラ Mu'ayyid al-Dawla を将とする軍隊を派遣する。ファフルはズィヤール朝君主カーブースと共同してムアイドと戦うが敗走し、サーマーン朝ホラーサーン総督ターシュの許へ逃げ込み、援助を請う [Tajārib II: 416; Dhayl: 10, 15-17, ; *Kāmil* VIII: 706-708; IX: 10-11; Zayn: 38-39]。

ここにおいてアドゥドは、ムアイドを東方へ派遣すると共に、サーマーン朝君主ヌーフ II 世に使者を送り、ファフルとカーブースの引き渡しを要求する [Dhayl: 24; Yamīni: 51]。Dhayl はその内容を詳細に伝えている。以下はその要旨である。

- ・以前合意された金の支払いと引き換えに、ファフルとカーブスを引き渡す事
- ・和平更新の破棄を望むのであれば、以前の取り決めに反故にする事
- ・二人を追放して、和平の更新を望むなら、我々は同意する事
- ・二人を手許に置くならば、二人をブハラへ連行し、その郎党たちと引き離す事
- ・我々の二人に対する安全保障を望むのであれば、以前の取り決めに反故とする事
(その際、二人が我々の許へ出頭する必要がある事)

このような条件をアドッドはサーマーン朝側に突き付けているのである。更に和平を締結する際には、ターシュの判断ではなく、あくまでヌーフⅡ世の署名と高官たちの証言 *shahādāt* が必要である旨を伝えている [Dhayl: 24-26]。

まず言える事は、この派遣使節の背後には、ムアイド率いる大軍が控えており、軍事力を背景とした要求であるという事である。その内容もルクンの時の交渉とは異なり、強い態度で臨んでいる事が読み取れる。そして重要な事は、アドッドがサーマーン朝のホラーサーン総督ではなく、同朝君主との交渉を行っているという事である。これまでの交渉はホラーサーン総督とジバル政権の交渉が主であったことを第Ⅳ章で示したが、今回は君主の署名を求めている事から考えて、アドッドは、即ちブワイフ朝はサーマーン朝と対等の立場で交渉に臨んでいる事が分かる。

こうしてファールス地方に割拠し、勢力拡大を図ってきたブワイフ朝は、ここに至って東方の雄サーマーン朝と対等な立場に立ったと考える事ができるだろう。

以上、ジバル政権とサーマーン朝の関わりについて様々な点から考察してきた。ブワイフ朝ジバル政権はサーマーン朝の強大な勢力を憚って、同朝との交渉においては常に下位に甘んじてきた。その一方で、軍事力強化を図り、サーマーン朝の侵攻を全て退けると共に、同朝内部への調略や周辺諸侯への様々な外交政策、あるいはカリフの権威を利用した政策を行い、サーマーン朝の西進を阻み自勢力の拡大に努めたのである。そしてアドッドの晩年に至って、ブワイフ朝はサーマーン朝と対等の立場に立つ様になったのである。

371 H年の使節派遣後にアドッドが死去し、ムアイド軍が撤退したため、ブワイフ朝勢力がサーマーン朝ホラーサーン領に進出する事はなく、両王朝の立場が逆転するまでには至らなかった。

ブワイフ朝の発展は軍事的成功にのみ基づくものではなく、初期においてはカリフの権威を利用して外交を行い、またサーマーン朝など強大な勢力に対しては表裏一体の様々な政策を行い、自政権の立場の強化を図るという戦略的成功にも依拠していたのである。またカリフの権威の利用という点に注目すれば、ブワイフ朝の傀儡となった後も、カリフの権威は諸政権の行動に影響力を持った事が本稿の検討から明らかとなった。

参 考 文 献

- Aḥsan* : al-Muqaddasī, *Aḥsan al-taqāsīm fī ma'rifat al-aqālīm*, Leiden, 1906.
- Bukhārā* : al-Narshakhī, *Ta'riḫ-i bukhārā*, ed. Mudarris Riḍawī, Tihirān, 1363.
- Dhayl* : al-Rūdhrawarī, *Dhayl tajārib al-umam*, ed. Amedroz, Miṣr, 1916.
- Kāmīl* : Ibn al-Athīr, *al-Kāmīl fī al-ta'riḫ*, 13 vols., ed. J. Tornberg, Bayrūt, 1965 - 66.
- Mu'jam* : Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, 5 vols., Dār Ṣādir, Bayrūt, n.d.
- Siyāsāt* : Niẓām al-Mulḳ, *Siyāsāt nāma*, ed. M. Qazwinī, Ṭihirān, 1334.
- Ṭabaqāt* : al-Jūzjānī, *Ṭabaqāt-i nāshiri*, ed. 'Abd al-Ḥayy Ḥabībī, Kābul, 1342 H.
- Ṭabaristān* : Ibn Isfandiyyār, *Tāriḫ-i ṭabaristān*, 2 vols., ed. 'Abbās Iqbāl, [1941] .
- Tajārib* : Miskawayh, *Tajārib al-umam*, 2 vols., ed. Amedroz, al-Qāhira, 1914 - 15.
- Takmila* : al-Hamdānī, *Takmila ta'riḫ al-ṭabari*, Bayrūt, 1961.
- Yamīnī* : al-'Utbi, al-Yamīnī, ed. I. Dh. al-Thāmīrī, Bayrūt, 2004.
- Zayn* : al-Gardizī, *Zayn al-akhbār*, ed. Muḥammad Khān Qazwinī, Ṭihirān, 1315 (1937).
- Bosworth, C.E. (1981) The Rulers of Chaghāniyān in Early Islamic Times. *Iran* 18, 1 - 20.
- Busse, H. (1969) *Chalif und Grosskönig, die Buyiden im Iraq (945 - 1055)*. Beirut.
- Darke, H. (1960) *The Book of Government or Rules for Kings: The Siyāsāt-nāma or Siyar al-Mulūk of Niẓām al-Mulḳ*. London.
- Donohue, J. (2003) *The Buwayhid Dynasty in Iraq 334 H./ 945 to 403 H./ 1012: Shaping Institutions for the Future*. Leiden.
- Kabir, M. (1958) The Buwayhids of Jibāl and Rayy A. H. 322 - 420/A. D. 933 ~ 4 - 1029. *Journal of the Asiatic Society of Pakistan* 3, 29 - 42.
- Kabir, M. (1964) *The Buwayhid dynasty of Baghdad (334/ 946 - 447/ 1055)*. Calcutta.
- Kennedy, H. (1986) *The Prophet and the Age of the Caliphates*. London.
- Minorsky, V. (1956) The Older Preface to the "Shāh-nāma". In: *Studi Orientalistici in Onore di Giorgio Levi Della Vida*, Vol. 2, Roma. 159 - 179.
- Nāẓim, M. (1931) *The Life and Times of Sultān Maḥmūd of Ghazna*. Cambridge U. P.
- Treadwell, W. L. (1991) *The Political History of the Sāmānid State*. Ph. D. Thesis, University of Oxford.
- Treadwell, W. L. (2003) Shāhanshāh and al-Malik al-Mu'ayyad: The Legitimation of Power in Sāmānid and Būyid Iran. In: Farhad, D. & Meri, J. W. (eds.) *Culture and Memory in Medieval Islam: Essays in Honour of Wilferd Madelung*. London. 318 - 337.
- 橋爪 烈 (2003) 初期ブワイフ朝君主の主導権争いとアッバース朝カリフ —— イマーラ, リヤーサ, ムルクの検討を中心に —— 『史学雑誌』 112 (2), 60 - 83.